

York, 1961 pp. 97

著者クンチャラニングラート氏はジャカルタのインドネシア大学の教授、インドネシアにおける社会学、人類学の第一人者で、1957年には A Preliminary Description of the Javanese Kinship System の好著をエール大学の SE Asia Studies, Cultural Report Series で出していること周知の如くである。ここに紹介するのは中部ジャワにおける二つの村の Gotong Rojong についての社会人類学的調査の報告である。Gotong Rojong というのは一般には村人間の協力の意味であるが、更に参加者の自発的協力とか、共同の福祉に貢献せんとする協力とかいう理想主義的な意味にも使われているという。しかし著者は現実的な Gotong Rojong の原理や社会的側面を明らかにしようとしている。Gotong Rojong は Bactiar Rifai (農学)、Widjojo Nitisastro, J. E. Ismael (共に経済学) 等によっても注目され、インドネシアの村の理解の為に重要な概念である。本書でこの為に実態調査をした村は中部ジャワの二つの desa, Tjelapar と Wadjasari である。前者は外部との接触があまりなく、封鎖的な村であり、後者はハイウェイに近く開放化に向っている。この二つの村を選ぶことによって Gotong Rojong の変化の過程にも注目しようとしている。内容は(1)本書の目的、(2) Gotong Rojong の概念、(3) Tjelapar 村、(4) Wadjasari 村、(5) Gotong Rojong に関する資料記述の方法、(6) Gotong Rojong についての資料の分析からの若干の帰結で、各村の記述では、位置、住民、血縁紐帯、近隣、土地所有、収入源、日常生活々動など取扱われている。更に広く Gotong Rojong を調査し、比較研究するための第一着手であるというから今後の発表が期待される。本書はコーネル大学の Modern Indonesia Project の Monograph Series の一冊として出たもので、Clair Holt 夫人が英訳したものである。(棚瀬襄爾)

T. L. Reller, E.L. Morphet, (ed);
Comparative Educational Administration,
N. Y. 1962 pp. 438

比較教育学は、教育・文化の世界的拡大に伴って、近年にわかに脚光を浴びるようになった新しい学問であるが、本書は教育の組織と行政に焦点を合わせながら、世界の主要国における教育の傾向と問題およびその背景を分析し、「比較教育行政学」の一つのあり方を示唆しようとするものである。編者は、「現世代が——おそらくは次の世代もひとしく——直面する最も火急の、そして基本的に最も重要な問題は、教育である」という認識のもとに、比較教育行政の研究が「国内のおよび国際的緊張の理解と解釈および将来におけるそれらの増減の可能性のいくつかに重要な鍵を提供する」ことを期待して、この本を編纂している。

しかし、第1章および第19章以下の若干の章を、比較教育行政の研究手法および2、3の問題、(教育の目的、統制、管理など)の分析と検討に当ててはいるものの、第2章から第18章にわたって世界の主要国のほとんどをもうらして紹介しているために、またその執筆者をそれぞれ異にするために、一つの論文としては多少モザイク的な感じを免れ難い。けだし、これは比較教育学のもつ一つの宿命的な性格であろう。また、それぞれの国の教育行政については、そのほり下げ方が足りないくらいはあるが、低開発諸国に関しては、文献が少ないだけに、一つの資料的価値はある。

東南アジア関係では、第12章でインドが現地出身の D.D. Karve によって、また第15章でフィリピンが編者の一人 E.L. Morphet によってそれぞれ紹介され、第18章の「組織と行政における傾向」では、パキスタンとフィリピンがそれぞれ他の執筆者によって扱われている。インドとフィリピンについては、いずれの場合も、教育の歴史的・社会的背景、教育の組織と行政、教員養成、大学の管理機関、教育財政、その他若干の問題と傾向などを知ることができる。

いわゆる「近代化」に教育が重要な役割をはたすことを考える時、また地域研究に先進諸国をも含めた総合的洞察が必要であることを考え合わせる時、本書は比較教育のみならず東南アジア研究に関心を寄せる人も一読してよい本ではなかろうか。編者は共にカリフォルニア大学教育学教授。(高木英明)